

フィリピンにおける就業支援の可能性～現地資源に着目して



**社会イノベーションのためのインタラクティブデザイン
～フィリピンの資源であるココナツを用いた酒作り事業を通じて**

政策・メディア研究科 2 年

81025559

森住直俊

概要

本研究の目的は、フィリピンの貧困層の子どもを取り巻く「子どもの頃、教育を受けられないと就業できず、親になっても自分の子どもに教育を受けさせられない」という負の連鎖を断ち切り、「現地の若者に就業の場を提供することで、教育を受けられない子どもに教育の機会が提供される」正の循環を生み出すことである。

この目的を達成するため、プロジェクト(Wanic Project 1.0)を企画し、フィリピンの資源であるココナツをデザインした「もの:高付加価値の酒(Fresh Wanic)とその酒を製造するためのキット(Wanic Kit)」を実装し、2度の試飲会を実施した。その結果、Wanic Project 1.0 では、正の循環を生み出す「しくみ」がないため、負の連鎖を断ち切れる可能性はあるが、正の循環を生み出すことは難しいと考えた。

そこで改善案(Wanic Project 2.0)として、正の循環を生み出すための「しくみ:株式会社ワクワークイングリッシュが実践している、孤児院で奨学金をもらっている学生を1人雇用することで、孤児院にかかっていたコスト(若者の生活費、学費)を削減し、新たに2~3人の貧困層の子どもを孤児院が保護でき、保護された子どもたちに教育機会が提供されるしくみ」を導入した。Wanic Project 2.0 では、学生に限定せず、フィリピンセブの孤児院で生活する19歳から21歳の若者を対象とし、試作したWanic Kitを用いて酒作りを試行した。その若者にインタビュー調査したところ、彼らは、就業意欲が高く、Wanic Project への参加を通じて、自分の力で自立することを望んでいることが分かった。

この結果は、Fresh Wanic を安定的に製造できれば、「もの」と「しくみ」の両方が機能し、Wanic Project を通じてフィリピンの子どもを取り巻く負の連鎖を断ち切り、正の循環を生み出すことができる可能性を示唆している。

目的

研究目的は、フィリピンの貧困層の子どもを取り巻く「子どもの頃、教育を受けられないと就業できず、親になっても自分の子どもに教育を受けさせられない」という負の連鎖を断ち切り、

「現地の若者に就業の場を提供することで、教育を受けられない子どもに教育の機会が提供される」正の循環を生み出すことをである。

これまでの活動

目的を達成するため、フィリピンの資源であるココナツをデザインした「も:高付加価値の酒(Fresh Wanic)とその酒を製造するためのキット(Wanic Kit)」を実装し、2度の試飲会を実施した(図2)。

それらを用いて、図1に示すような現地にある負の連鎖を断ち切り、正の循環へと変革する活動を企てた。

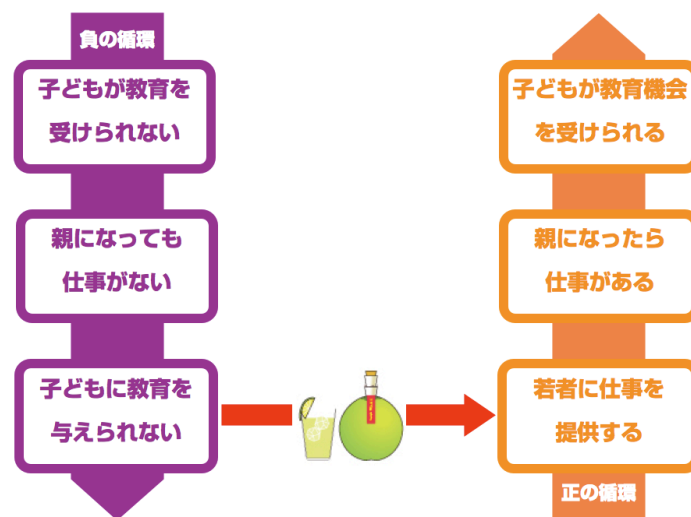


図1:コンセプト1



図2: Wanic Kit と Fresh Wanic

今期の活動

提案

これまでの活動を行なった上で、目的の負の連鎖を断ち切ることはできる可能性はあるが、正の循環を生み出すことは難しいことが分かった。理由として、正の循環を生み出すことができていないことが考えられる。そこで、今期の活動では、正の循環を生み出すための「しくみ」を導入し、活動（WanicProject2.0）を行った。

Wanic Project 2.0 の対象は、孤児院である。孤児院の子どもは、5歳程度で保護、20代(大学生)までいる。20代になった若者は本来、孤児院から出てはならない。しかし、20代になっても就業の場がないため、孤児院から出ることなく留まっている若者が多い。これは、孤児院にとって大きなコストであり、問題である。そこで、Wanic Project 2.0 では、WAKUWORK モデルを用いて以下の流れで孤児院の問題を解決し、正の循環を生み出す。

1. 事業を通じて就業の場を提供し、20代の若者を自立させる
2. 20代の若者が自立したことで、
孤児院にかかっていたコスト(学費、生活費)が削減される
3. コストが削減されたことにより、新たに孤児院に子どもが保護され、
保護された子どもに教育機会が提供され

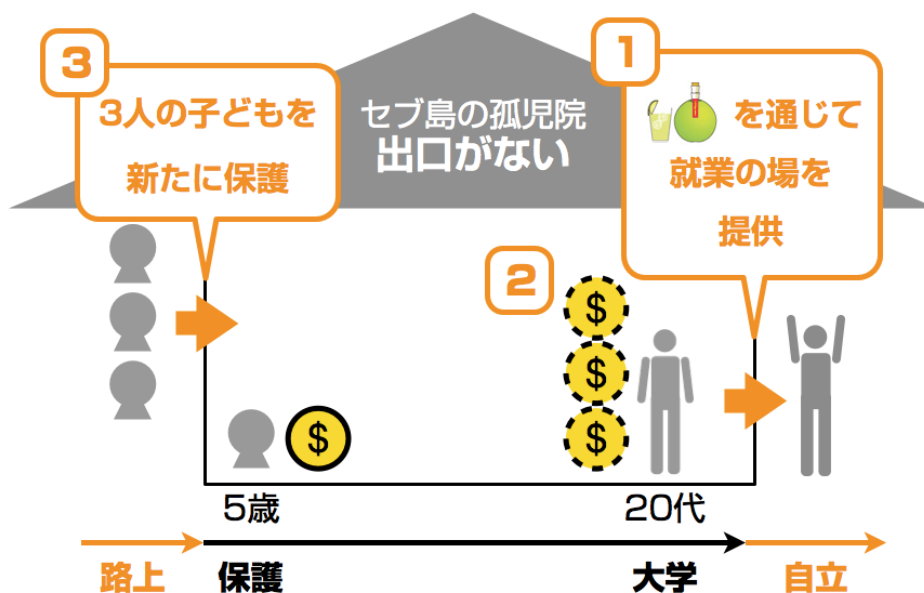


図3: 「しくみ」 WAKUWORK モデル
Wanic 作りワークショップ

目的は、正の循環を生み出す「しくみ」を取り入れた **Wanic Project** の将来のパートナーとなる孤児院で生活している若者に **Wanic** を作ってもらい、若者自身はもちろん、孤児院の運営者がどう感じるかを調査することを通じて、社会変革モデルを取り入れた **Wanic Project 2.0** の可能性を探ることである。フィリピンセブの孤児院 **Community Scouts for Boys** にて、19 才～21 才の若者（男）5 名を対象に、**Wanic Project** の概要を説明し、ワークショップ、インタビュー調査を行なった（図 4）。



図 4：若者と Wanic

調査結果

活動で提案している、「しくみ」は、若者の就業意欲は欠かせないものであると考えていた。その意欲が多くの子供にあるということが、このたびのインタビュー調査で明らかになったことは、とても興味深い。元々、**WAKUWORK** の講師が毎週日曜日に、対象とした孤児院を訪れ英語教育を行っていた背景も、もちろん大きな要因となっているのであろう。しかし、そうであったとしても、対象者、全員が学業に関する回答をしたことは、若者には、修学意欲があることが伺える。そして、そういった高い学習意欲をもった学生にとって、**Wanic** プロジェクトが有効であることもインタビューからその動向がみられる。結果、孤児院出身の若者と共に現金収入を向上させる上で、予測していなかったが、孤児院出身の若者は、修学意欲が強くなることが分かった。また、彼らは簡単で、楽しい仕事を望んでいる可能性があることが分かった。ただ、彼らは今後、大学生になり自立していかななくてはいけないため、楽しみながらも仕事のなかで、彼ら自身が成長できるような環境を意図的に用意しておく必要があることも発見できた。